

中国芸術史研究への展望

京都大学が東京・品川の「京大東京オフィス」で開く連続講座「東京で学ぶ 京大の知」(朝日新聞社後援)のシリーズ6「中国学研究最前線」。3回目の2月22日は、絵画を題材に「形」の概念について考えるのがテーマだ。京都大学大学院文学研究科の宇佐美文理(ぶんり)准教授が「中国芸術史研究への展望」と題して講演し、中国の絵画を通して見える「形」のとらえ方を、「気」の思想の視点から解説した。



中国書画の名作をスライドで紹介しながら講演が進められた。スライドの左が郭熙、右が雪舟の山水画。「固定的と流動的」という宇佐美准教授の話が何となくわかる

● 固定的な雪舟、流動的な宋画

そもそも「形」とは、「気」とは。講演は、こうした概念を整理するところから始まった。

宇佐美准教授によれば、「形」は「目で見てとらえられるもののうち、色でないもの」。絵画の世界では、形は必要不可欠だ。一方で「気」は「すべてのものを考えるときに、気で説明する」と言えるほど、中国では基礎的な概念だという。この「気」と「形」の考え方がかみ合わなかったため、様々な絵画理論が中国で考え出されたと宇佐美准教授はみる。

「気」には様々な性質がある。

まず、「気は絶えず陰と陽の交代を繰り返したり、集散したりしつつ、流体としての性質をもつ」と宇佐美准教授は指摘した。「漢方で『気の巡りが悪くなると病気になる』と考えるように、気は常に循環していないとだめだという感覚がある。絵の中でもいろいろなものが流れていないといけない」

その一例として、宋の時代に活躍した中国を代表する山水画家、郭熙(かつき)と、室町時代の日本の禅僧、雪舟(せっしゅう)が描いた2枚の山水画をスライドで示した。「雪舟の描いた山水は、固定的な形象で描かれているが、郭熙の山水は早春の陽気が立ち上ってくる様子をとらえており、明確な形をもたない流動した形象で描かれている。固定的な形で描くことを嫌う傾向を中国の絵は持っている」と分析する。

● 技巧より描き手の人品を鑑賞

次に人間の内面にある気が、その人が描いた絵や書などに表れるという「気象」の考え方を取り上げた。「字には人柄が表れる」などという言い方で、現代にもなじみのある考え方だ。



宇佐美文理・准教授。専門は中国哲学で、哲学の概念と絵画の概念の関わりを研究テーマにしているという

この考え方を突き詰めると、外見的な形よりも描いた人の内面のほうが重要だ、ということになる。宇佐美准教授は中国絵画の評価の基準を示す「画之六法(がのろっぽう)」という言葉を紹介し、「筆遣いや形、色、構図よりも重要なものとして『気韻生動(きいんせいどう)』というものが考えられた。そもそも絵画は形が勝負のはずなのに、形を超えたものを考えないといけなくなった」と指摘した。

こうした考え方を色濃く反映したのが、詩や書画に通じた知識人が描く「文人画」のジャンルだった。文人画は宋代以降に盛んに描かれ、絵の技巧や形ではなく、描いた人の人品こそが鑑賞のポイントとされた。

●「液体」としての風景観

ただ「気象」の考え方を押し通すと矛盾も生じる。宇佐美准教授は「箱モデル」と「非箱モデル」という言葉を使って説明を続けた。

箱モデルは、「箱」と「箱の中身」のように形と内面は別々だとする考え方で、非箱モデルは、外見と中身はつながっている、という考え方を示す。

気の思想は非箱モデルだ。しかし、精巧に作られた模写作品に非箱モデルをあてはめると、模写作品でも原本でも同じ気を持っていることになってしまう。これでは不都合なため、模写作品には箱モデルがあてはめられることになった。

あるときは非箱モデルで、都合が悪いときには箱モデル、というのでは論理が破綻しているように思える。しかし、前近代の中国では問題視されなかったという。宇佐美准教授は「一見矛盾していることも、場面場面で使い分けていた。形と気の関係は何が正しいということではなくて、どう説明すればうまくいくかという点で考えられていた」とまとめた。

宇佐美准教授は講演の最後に、形を流体、液体ととらえる気の思想に通じる芸術として、風景を詠む詩を取り上げた。そこで使われるのは、「風が体に注ぐ」や「光が降り注ぐ」といった表現で、「風景を液体として把握し、それが自分の体の中に染みこんでくるようなイメージ」だ。こうしたイメージは山水画を描いた画家も共有していた、と宇佐美准教授は考える。「あくまでも液体を志向していくところに、画家の姿勢があったのだろう」と締めくくった。



講演では、現代の日本語で使われる言い回しにも、気象の考え方に基づく表現や、風景詩の表現があることが紹介された。興味深い指摘が相次ぎ、聴講者は熱心に聴き入った

(※原稿及びクレジット未記載の写真は朝日新聞社提供)